

骨——竹の影——と骨との間にはバイオレットのそれはく鮮やかな色彩だつた、で早速戸を開いて紫色のある物を干してあるではないかと見たが何もなく、唯空の色が美しく美しく遠い様な氣がした、これも矢張餘色の配合の一である。

こんな例を挙げた日には數へ切れぬ程あるが、これで措くことにする。

吾々がこの二つの眼の使い具合によつては、かゝる自然の妙味ある色彩の配合を味ふ事が出る、それも色彩學の造詣深ければ、より以上の面白い現象を發見する事が出来るだらうと思ふ、僕が常に主張する、色彩の配合圖を備へておくといふのは、即ち茲である。

僕は此自然に同化せられてしまいたいと思ふ、尙偉大なるデリケートの變化を味ひたいと思つてゐる。(完)

素人の繪畫鑑賞に就いて

横濱 S K K 生

私は今此問題に就いて少しく述べてみたいと思ふ。勿論是は私の貧しい考へに依つて、其淺い意見を述べてみる許りで此主義を諸君に悉く適用せられよと云ふ意味でもなければ、望みでもない。無論人には其身姿や顔容の異なる如く其固有な趣味性や特有な鑑賞態度があらう、繪畫其物に對して自己のチャームを利己的に所得しよとする者もあれば、美術と云ふ管見を以て之に

望むデイレツタントもある、要するに其鑑賞範圍は擴く極めて自由であるに相異なるが、併し私は素人として繪畫を面白く鑑賞するには最も適當ではないかと思ふ方法を茲に記述したいのである。

吾々素人は其境遇の如何に依つて同じ美術に其鑑賞や研究の餘地と方面に種々の變化があるものであらう、普通日々社會上の業務に従事せねばならぬ素人が、はたして専門家と同様に興味ある繪を作り得る事が出来やうか、そして素人だとても其頭が進んだ時は自己の多く研究し得ざりし繪畫に對して満足を表し得だらうか、吾意を得ないとすれば其時其人の趣味性は行き詰つて遂に他の下劣な歡樂に貴ぶべき趣味性を誘引されはしないか、これと思ふと吾々が技巧上にのみ信賴するのは甚だ好ましくない事と思ふ。

畫には自ら異つた味がある。夫れは顏料の趣味と、其顏料を運用する技巧の味と、及び主觀とである、此三方面を同時に玩賞する事も出来やうし又個々に之を味ふても愉快は盡きない事と思ふ。併し個々に味ふのは所謂深い研究の態度が必要でかくせねば又玩賞する生氣がなく、從て飽きが来る、故に私は業務の餘閑に樂しまうとする素人には顏料、技巧、主觀の三方面から繪畫を鑑賞する事を得策とするのである、即ち繪畫を鑑賞する範圍を擴め、ワットマンに繪の具をなする許りでなく時に美術史を繙く事もあながち無益の事でもあるまいし、水彩の良否を鑑別し得ると同時に油畫や日本繪の妙所をも感受すると言ふ事

も甚だ面白い事と云はねばならぬ。要するに私は素人諸君には
擴く繪畫を愛玩する事を良策でないかと思ふのである。

眞のデイレツタントは藝術の敵であると云ひ、素人の繪畫は副
産物の一片に過ぎぬと云ふけれども、而し私は一般人の美術愛
好の精神が如何程迄其の時代の美術向上の助力となるか計り知
る事が得ないだらうと思ふ。而して不世の天才の輩出も敢て衆
人の美術好愛の熱度に關係が無いとも云へない事であらうと思
ふ。

以上は甚だ粗雑なる一茶話として見て頂きたい。

先生を懷ふ

一 末 輩 生

私は朝から日暮まで學校と云ふ所で時間を潰さねばならぬ小
學校の先生である、現今の教育上の事柄には餘程間拔けた國家
の要求がある所を兎も角もやらねば小學の教員といふものゝ義
務がつとまらぬのである。いつもの如く私は擔任の教室に閉籠
つて居て、偶然教員室に出て見ると二枚の葉書が机の上に置い
てあつた、何れも先生の御令息から御死去の報せであつた、驚
いた——二枚と云ふのは宛名の苗字が合つて、名前が違つて居
たからであらう、實に吃驚した。

小學校の教員より、中等程度の學校の教員の方が安樂なこと
は知つて居るけれど私は東京に居らねば私の腕の退步する恐れ
があるからだ、私の様なものが東京に居るには小學校の教員で

もせれば外に養つて行く道が付かない、即自個の進歩の爲めに
居るのであるが満更小學校教員を犠牲としたのではない、大い
に自分の職分に對しても腕の落ちないと云ふ所がある。かくつ
まらぬ貧乏生活の教員をしても東京に居らねばいけないと思
想を私に與へられたのは先生の賜であるのだ。

繪をかくことも、見ることも知らなかつた私が少しでも繪を
研究すると云ふ方向へ向けさせられたのは先生だ、到底田舎の
小學校の先生で一生腐るのは駄目だと考へた私は或る學校の
圖畫科の試験を受ける爲めに國を無斷で飛び出した、何事でも
出来ないことはないと云ふ自分の無謀の考へが斯くなさしめた
のである、けれど東京に出てどんな先生に便つてよいかがわか
らぬ、或る友人が聞き傳へたのが大下先生であつた、東京で人
を訪問するには紹介状が必要であるそうであつたが、私は「何」
の一言で田舎臭い山出し風で先生のお宅を訪れた、今から思ふ
と奥様であつた、直ちに導かれて先生に逢ふことを許された、
ぶしつけに來意を語ると「諾」と云はれて細かいことまで丁寧
に教へられ御所藏の大切な外國の本まで見て置けと貸し與へられ
た、私は東京の人達は豪いと思つた、何處の馬の脚やら牛の骨
か分らぬものをかくまでも御親切にとは、けれど皆んな東京
の人達はそうとは云へないであらう、只それは先生丈の特質で
ある、それから私は先生及先生の御友達の色々な深い専門の先
生のお世話になることゝなり晝夜一ヶ月にして試験を受けて置
いて二百里もある田舎へ歸つた、すぐ郡長が所罰すると云ふの